



世之介と出会った人生と出会わなかった人生で何かが変わるだろうかと、ふと思う。たぶん何も変わりはない。ただ青春時代に世之介と出会わなかった人がこの世の中には大勢いるのかと思うと、なぜか自分が得をした気持ちになってくる。

吉田修『横道世之介』

誰の人生にも温かな光を灯す、青春小説の金字塔。1980年代後半、時はバブル真ただ中。大学進学のため長崎からひとり上京した横道世之介、18歳。自動車教習所に通い、アルバイトに精を出す、いわゆる普通の大学生だが、愛すべき押しの弱さと、隠された芯の強さで、さまざまな出会いと笑いを引き寄せる。友だちの結婚に出産、学園祭でのサンパ行進、お嬢様との恋愛、そして、カメラとの出会い……。そんな世之介と、周囲にいる人たちの20年後がクロスオーバーして、静かな感動が広がる長編小説。

(Amazon文春文庫商品説明より転載)

先日、僕の退職を祝って昔の同僚たちが集まってくれた。随分遠くからきてくれた人もいてありがたかった。会はほとんどクラス会状態で僕そっちのけで盛り上った。そういえば、いつだったか糸井重里さんが「ぼくは、『通夜のにぎやかな人』になりたいと思う。あいつはアホだったろくでもなかったと、言いあうために集まってもらえるような人が憧れだ」(ほぼ日「今日のダーリン」)と言っていたことを思い出した。自分もそんな人になりたいと思っていたが、少しは近づけた気がして嬉しかった。なにせ、ろくでもない方面はさておき、少なくともアホであることは間違いない。

購買にパンを買いに行ってお金が足りないことはしょっちゅうだったし、スーツの上下を取り違えたまま出勤することもよくあった。そういえばこんなこともあった。図書局員とビブリオバトルに参加した時のことだ。参加資格に制限はないと言っても、高校生が主の大会である。高校生に花を持たせるのが普通だ。それなのに「大人の本気を見せてやる」と言って僕が優勝してしまった。大人げないことこの上ない。場を読まないアホである。

と、まあ数え上げればきりが無いが、言うまでもなくアホだから人が集まるのではない。アホなことも笑って許されるくらい、人としての魅力があるのかが問われているのだ。

吉田修さんの『横道世之介』の主人公、横道世之介はきっと糸井さんの言う『通夜のにぎやかな人』なのではないかと思う。彼のところにはなぜか人が集まる。頼まれたらイヤと言えない人の良さと嫌みのない図々しさで周囲の人間を巻き込みながら引き起こすエピソードはアホそのもので、あっちこっちと彼の人生は横道にそれていく。物語は彼の人生と、彼とともに青春時代を送った人たちの人生を交錯させながら進んでいく。後年、街中で世之介に似ている人を見かけた登場人物の一人はふと呟く。

世之介と出会った人生と出会わなかった人生で何かが変わるだろうかと、ふと思う。たぶん何も変わりはない。ただ青春時代に世之介と出会わなかった人がこの世の中には大勢いるのかと思うと、なぜか自分が得をした気持ちになってくる。

誰かをこんな気持ちにさせる生き方を僕はしてきただろうか？そう振り返ると自信はない。今、新たな人生をはじめようとする転機に立って、そうなれるよう日々を送りたいと思う。

ただ、一つ確実に言えることは、僕は今までたくさん得をしてきたということ。この三条の5年間は特に。

また、新しい職場でアホなことをしたり、横道にそれてしまったりするんじゃないかな。まあ、それがあつての自分。なるようになるさ。

みんな、元気で。お互い、新しい生活へ一歩踏み出そう！

